

## 前向く姿

遺愛女子高等学校 一年 小松 幸

私が小学二年生だったとき、東日本大震災は起こった。三月十一日、あの日を境に私の、そして私の家族の人生が変わった。私はそのことを悪く思っていない。ただ、机の下に隠れる前までの暮らしの続きが気になるだけだ。

私はいつも通り授業を受けていた。母は犬の散歩で外に出ていた時に地震が来た。教室にいた私達が最初に異変に気付かされたものは、天井からぶら下がるテレビだった。そんな話を話す暇もなく大きな揺れがきた。女子生徒の悲鳴、泣き声。今思えば、男子生徒の泣き声も混ざっていたような気がする。あの時の私は、体験したことがないことが起き、これから起きることに興味を持ち、訓練ではなく机の下に隠れることを楽しんでた。窓の外を見ると電柱が四十五度に傾いていた。八歳の私は三十分近く机の下で待機していたと記憶している。この時、他の地域、県の人々がどんな目にあっていたか、何が爆発したかなんて知りもしなかった。私が住んでいた場所は福島県の内陸部にあったため、津波の被害はなかった。原発からもある程度離れていたことから、避難命令は出なかった。

最初の揺れが収まるとすぐにスクールバスが出て友達と帰ると、家が半壊し、家の中は割れた皿、本、置き物などが歩いて入れない程に散乱していた。中でも印象的だったのは、傾いた冷蔵庫から出た卵が、割れて黄身がドロリと出ていた、という光景である。また、棚の物々が重力に繰られていた。日頃の行いが良かったのか、母はその散乱には巻き込まれずに済んだ。家の片付けが大方終わり、私はぼんやりと父が置いたランプの前に座った。その正面には、窓ガラス越しにユリの花が堂々と立ち、こちらを照らしていた。私はその勇敢さに心打たれた。その日は、勇ましいユリのお陰か、ぐっすりと眠ることができた。

その後、一週間程休校になり、両親は福島原子力発電所の爆発事故で、高濃度の放射性物質が放出されたことについて議論していた。学校がなく暇だった私は、犬の散歩にでも行こうと両親に断っていつもの散歩道を歩いた。田舎の森は気持ちがよく、田んぼの脇道も心地よかった。しかし、その時放射能が放出されていたことに気付くのは四年後になる。その時の傷かは分からないが、私の甲状腺には小さな

囊胞がある。

父と母は話し合いを重ねて、とりあえず母と子供達で短期間福島を離れることになった。その間、母は、混乱する私達を楽しませてくれた。不安になる暇がなかった程だ。今思い返してみると、突然始まった旅で先のことを考えなくてはならない中、故郷で誰もしていない事を母が一人でしたということは、思春期真っ只中の私に大きな影響を与えた。具体的に与えられたことは、自分の意見を持つことだ。以前の私は、周りに話を合わせて、自分オリジナルの意見・考えを生み出そうとしなかった。しかし、二〇十一年のことを思い返したある日、母の行動力に気付いた。その日から私はいつも、自分の考えを持つことにしている。

政治家は、「安全だ」と言うし、皆それを信じるし。父と母は私達に、移住し、転校することを告げた。私はそんなに嫌がらず、北海道に行くのが楽しみだった。お別れ会では感極まって泣いたけれど。

縁もゆかりもない新しい土地に来てからは、すべてが新鮮だった。新しい仲間に出会い、訛りに出会った。あの頃のことを懐かしく振り返る時に思ったことがある。新生活が始まってからの母の不安である。突き進む時は進み、折れたら折れる、そういう姿は正直カッコイイと思う。

思春期は、自分に自己価値のレッテルを貼ってしまうのが特徴の一つでもあると聞いた。私は今までにたくさん母とも父とも喧嘩してきた。どうしてそう思うのだろうか、どうして駄目だと言うのだろうか、なんで口出しするのだろうか……。その度に私は怒り、本当に嫌いになってきた。しかし、今、もしくは未来の大人の自分から見たら、きっと母が言ったこと、強制したことは正しかった。そう思う日がくると思う。

どんなに悲しいことがあっても、何を失敗しても、私は後ろを向かない。そして、母のような母になりたい。